自然保育・教育は、自然の中で子ども達の生き生き体験を支える活動です
＝地域の自然を使って、身近な友達、仲間とやってみませんか＝

上原貴夫（日本自然保育学会 会長・上田女子短期大学教授）

森の幼稚園など自然の中の保育・教育が盛んに行われています。

森や公園、野原や川など身近なフィールドを活用して子ども達の育ちと学び、保育・教育の活動を行ってみませんか。どこでも、どなたでも、身近でできます。

【世界の動向】

森の幼稚園は 1950 年代、デンマークから始まるといわれ、その後ドイツにも広がりを見せ、日本でも行われています。

【日本の状況】

森の幼稚園など自然をベースとした保育や教育を「自然保育」といいます。

・長野県では 2015 年より自然保育認定制度を設けています。

・広島・鳥取県では 2017 年よりそれぞれに「自然保育認証制度」を設けています。

・2018 年「森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク」が発足し、全国で 100 以上の多くの自治体が参加して森と自然を活用した保育、幼児教育を推進しています。

【自然保育の活動を行っている人達】

幼稚園や保育園として行われているものの外に認可外保育施設として実施しているもの、公民館や NPO、任意の団体、仲間どおしが集って行う活動など様々なスタイルがあります。

【フィールド：どんなところで行っているの】

森や林はもちろん、公園、田や畑、果樹園、牧場、近隣の神社や寺院の境内、川などまさに多様なフィールドで行われています。

共通しているのは「自然をベースとして行う保育・教育活動」ということです。

多様な場所で、様々な人によって自然をベースとして行うのが「自然保育」と言えます。

【どんなことをしているの】

中心は子ども達の「体験」です。それも子ども達が自ら発する主体的な体験です。

このような体験こそ、子ども達が自ら考え、工夫し、自身の豊かな感性で自らの意欲や意思、やりぬく、互いに思いやるなど、人として大切な気持ちや力を育むと考えるからです。

遊びや挑戦、冒険などとても重要です。キャンプや飯盒炊飯、森ウオーク、芝生ウオーク、正月やお盆、地域の祭りなど伝統行事を取り入れた活動など様々に工夫します。

【では大人たちはなにをするのか】

子ども達の主体的な体験・自主的な意思をサポートします。見守りと笑顔が大事です。

例。私達の活動は通常、子ども達が子ども達に「今日は何するの～！！」といった声をかけることから始まります。「～～をしよう。」「～～で遊ぼう」も子ども達が互いに声かけをします。終わりの会も子ども達が進めます。なぜかというと主役は子ども達だからです。

【この活動を通して子供達に育ってほしいこと】

それは、自分で考え、仲間と協力してやり抜く力です。自然の中で、仲間と楽しむことができる自分を感じて欲しいと願っています。

私達は「ながの県森と自然の保育園」を 4 年間実施してきました。場所は県の施設をその時だけ借りています。佐久にある「望月少年自然の家」です。月に 1〜2 回実施しています。スタッフは私と現役の保育士、幼稚園教諭、元保育士、社会福祉士、学生などさまざまです。人数はその時々で異なりますが、およそ参加者は、子ども達 10〜15 人、保護者（お父さん、お母さん、時に祖父母）5〜6 人。スタッフ 4〜5 人。学生 4〜5 人。です。

活動の内容は、フィールドを活かした森ウオーク、森の中にあるアスレチック、飯盒炊爨、地域行事を取り入れた「どんど焼」、季節で「焼き芋」など身近な活動を行っています。

朝の会から始まりますが、通常「今日は誰が出席してくれる」「今日は何をする」「どこへいく」などの声かけから始まります。もちろんその日の計画は用意してありますが、その日の予定を決めるのも子ども達地震の発想から、を大事にしています。子ども達は見事に自分達でやっていきます。終わりの会もこのように子ども達主体で行います。

森ウオークも子ども達がどこへ行くか決めます。でも、たいがい道草ばかりです。この道草が大事です。そこで、子ども達は自分の気持ちで頭を使い、考え、仲間に声をかけ、一緒に楽しみます。お昼も自分達で思い思いに食べます。時間だから食べるのでなく、お腹が空いたから食べるお昼です。

子ども達は自分で（たち）でやったという体験をします。お昼という、生きるうえで大切な判断を自分達の発想で行います。とても生き生きとした時間、体験、成長が生まれます。

大人はそれを見守り、サポートし、支持します。

キーワード：自然保育、自然教育、地域の自然、主体的な体験、主役は子ども